

海外の話題

香港の空は白？黄色？青？ —最近の香港大気汚染等環境問題見聞—

農林中央金庫 香港駐在員事務所長 松 尾 章

昨年と違い今年の香港の空はだいぶ明るい日が多い。今年4月中旬、小生が昨年着任以来「香港にもこんなきれいな空があったの？」と思わず周りの日本人、香港人に聞いたくらい本当に澄んだ青空を見ることができた。翌日の朝刊は地元紙をはじめ経済中心の英字新聞（South China MP）でさえも1面トップに写真付で報道していたくらいだ。

昨年来、香港の環境問題については中国同様に、世界の世論から厳しい目が注がれてきた。香港に在住する投資銀行の従業員が家族ともども香港からシンガポールへ避難しているとか（⇒これには、シンガポール住宅事情悪化の一因という副産物が付いてきた。）、香港に着任するインセンティブ料として給料に健康手当を上乗せするとか、米国ビジネスマンの間では環境の悪さから香港赴任が不人気である、などの調査結果もあり、特に欧米系企業からの反応が大きかったようだ。

香港政庁も大気汚染にかかる各種対策に懸命に努力しているようだ。例えば、公道に排気ガス観測機を設置し規制基準観測を始めたし、官庁他公共交通機関の冷房設定温度を25.5度に上げるなどしている。更には、基準大気汚染指数をもとに、繁華街（銅羅灣や中環）への車両乗入れ禁止措置や学校休校措置を議会に諮問している。また昨年11月下旬には、香港総商会（日本でいうところの「日経連」）主催の「Business for Clear Air」なるカンファレンスが開催されたが、民間レベルでも香港総商会が中心となって「クリーン・エアー憲章」（賛同企業は、環境アセスメント実施と省エネ目標設定およびそのモニタリング実施が義務付けられる。）の推進啓蒙活動を行っている。ここには香港行政長官（ドナルドツァン）も出席したわけだが、主催者側の意に反して香港の大気汚染濃度は東京やソウルと変わらず、平均寿命も日本と肩を並べる長寿都市であると述べるなど自己弁護を交えて憲章参画を呼びかけた。

今回の相対的にクリアな空はその後7月まで続き、香港政庁もこれまでの政府対策の努力によってもたらされた結果だと胸を張ってコメントしていたようだが、実際のところは主要な香港の大気汚染元凶はご案内のとおり大陸（広東省）の存在が大きい。この数ヶ月香港上空の風向きが北西向

きで香港自身の汚染も含めて大陸のほうへ押しやったというのが真相のようだ。小生が昨年香港へ着任した頃は、天気は良くても白い不透明なスモッグが漂う視界の悪い状況が毎日のように続いたし、夜も期待はずれの不鮮明な夜景を見ながらこれが普段の香港の空かと思ったものだ。今回、香港の空の変化を体験して改めて環境問題に関心を持った次第である。

関心を持ち始めるといろいろと見えてくるもので、最後に最近の広東省気象局発表の環境に関する気になった話題を2つお伝えしたい。一つは、広州の第1四半期の雨は100%酸性雨でしかも pH4 の酢よりも酸っぱい pH3.8 だったということ。もう一つは、地球温暖化分析の結果、早くて 2030 年、遅くとも 2050 年には珠江デルタの一部、香港の中でも海鮮料理の美味しいラマ島の一部、同じく海鮮料理のメッカ西貢などが海の中に沈むという衝撃的なものであったこと。こうならないように願いたいものだ。

